

【資料】 宍道湖遊覧記事抜粋

「山陰新聞」(明治40年[1907]5月26日付)

「宍道湖御遊覧」 昨日は、宍道湖上に於て松平伯爵の催に係る遊船を御覧あらせられるべく前日仰出されたるに就ては、先づ桂東宮主事は昨日午後一時三十分松永知事の馬車に便乗して城山御旅館を出発し、八束郡法吉村国屋字堂形へと先着ぬ。廳(やが)て殿下にはご予定のごとく午後二時御旅館を御出門あらせられしが、当日は御微行のこととて保田警視憲兵一騎先駆となり、御召馬車には木戸侍従長御陪乗、第二馬車には吉田内蔵主事、侍従武官、憲兵二騎護衛し、外に薬剤師扈從(こじゅう)せり。御順路は県庁前御通過、内中原交融橋を渡り小片原に出でさせられ、中原字土手を御通過、天倫寺鼻に出でさせられ、天倫寺鼻の新設棧橋には緑門を作り日章を交叉ぬ、御坐船は紅白の幔幕を張廻はされ、欄干にも日章を揚げられて準備周到なりき。御坐船の椅子、卓子等は何も宮内省貴顕用の品とて、その美麗なること眼を眩せん計りなり。斯くて二時二十五分御坐船に御移乗、木戸侍従長、村木武官長、侍医武官各一名、及び東郷大将夫々御陪乗せり。奉供船第一船には桂東宮主事、松永知事、松平伯爵代松平子爵、吉田内蔵主事、第二船には村山少将その他の供奉員、第三船には藤本第一、本間第二、堀田第四の各部長、小笠原県技師、長谷川、青山、吉岡、松浦の各県属、第四船には福岡市長、高橋市助役、三谷市書記乗船、第五船には松平家令家扶家従等、順序正ぬ進行して、嫁ヶ島に御上陸。親しく写真機を取らせられ、御坐船、奉供船、其他の風光を撮影あらせられぬ。松永知事、随從上陸の際、撮影の中に加りし旨難有(ありがたき)御言葉を賜はり、四方の風色を御瞰下ありたり。それより湖岸を綾どる山名を一々知事に御下問あり。知事逐一これに奉答せぬが、山岳の名称由緒等は更らに調査の上至急差出すべく、同時に教育事業慈善事業、水難救済事業を調査して共に差し出すべく仰せ出だされたり。当日は中山東宮大夫に休暇を賜はぬ、特に東郷大将を仮りに湖上水師提督とぬての御思召ありぬやに漏れ承はる。東郷大将は湖上の指揮は稍々(やや)困難なりと苦笑せられたる由なるが、好話柄と云ふべし。夫れより凡そ一時間を餘す半程を経て獲魚の御遊覧あり、四時十五分頃還御ありたり。殿下の還御後松平伯爵代理松平子爵御礼のため御旅館に参入せり。因に記す、当日は灘町、堂形裏、茶町裏、大橋の諸方面より投網十艘攻打、外に曳網(方言に丈高網)十艘を繰出し二艘を一組とし、湖心に頗る壯觀を映じたりき。」

『皇太子殿下島根県行啓日誌』（明治 40 年 6 月、島根県行啓事務委員長・島根県事務官藤本充安編、87 頁）

「此日稍風（東北）アリ漣波起ル処、御座船ハ徐ロニ進ミテ順次南ニ移リ、約一時間ニシテ嫁ケ島附近ニ至ル。此間予テ準備セル投網船十艘（漁夫二十名）、曳網船十艘（漁夫三十名）ハ御座船ノ出御ヲ見ルヤ処々ニ捲打攻、曳ヲナシ、澁瀬タル鯉、鮒、鰯（ぼら）等百数十尾ヲ漁シ、御覧ニ供フ。斯クテ御座船ノ嫁ケ島ニ達スルヤ直ニ御上陸、四方の風光御展望アラセラレ、親シク御写真機ヲ把ラセ給ヒテ、附近御撮影遊ハサル。次テ松永知事ヲ召サレ、四辺ノ眺望、山岳、河川ノ名称ニツキ御下問アリ。尚ホ勸業上、教育上、慈善事業水難救済事業ニ関スル調書ヲ差出スヘキ旨御沙汰アリ。再ヒ御乗船遊ハサレ天倫寺鼻仮設棧橋ニ御着、御乗船アラセラレ、御順路ヲ御往路ノ通、午後四時十五分、御機嫌麗ハシク還御アラセラル。」

『記念 山陰道行啓録』（明治 40 年 9 月、角金次郎編、44 頁）

「湖上御遊覧（前略）御座船の船手は旧藩士原一忠外七名にして原氏は三紋扮装にて櫓を操り口を解きて沖に漕ぎ出せば、其他の各船咸な之れに従ふ。中瀬には猟師（漁師）町の投網船十艘（漁夫二十名）又た揖屋村より備来れる丈高網十艘（漁夫三十名）午前より既に二手に分かれて場所を構へあり。イザ御座船の出御と見るや投網は風上より捲打を始め丈高は下手より威勢よく引き始めたり。此日東風少々強くザワザワと小波の立てるを御座船は徐々漁船の中央を進み、斯くして各舟共に順次南に移り、処々にて澁瀬たる鯉鮒鰯等の漁られしと見る間に、御座船は一時間の後嫁ケ島近くに達しけり。殿下には夫れと嚮はすや、彼処へ寄せよとの御言葉あり。乃ち嫁島の北渚に御船を着け奉れば、殿下先づ御上陸遊ばされ暫し島内を御逍遥あらせられたる後ち、予て御携帯の写真機を探らせ給ひて先づ御座船と第一供奉船とを写させ給ひ、知事を顧みて、卿も此中に映て居るよと仰せ給ひぬ。申すも畏き事ながら、殿下には常に写真術を好せ給ひ、今回のご旅行にも絶えず御撮影あらせらるる由承りしが、此日は湖上極めて晴れやかなる上、双方にて網を打ち御す態のいとど御意に召したりけん。御舟の中よりも網引く態及び城山御座所杯御撮影遊されたり。尚ほ若葉濃き四方の山々を指させ給ひ、松永知事を顧みて種々御下問あり。知事は一々御答申上げたるに、更に宍道湖の周囲に折り重れる山々の名を謂れ、諸共に取調べ、尚ほ教育、慈善、水難救済の各事業を仔細に取調べて差出せよとの御諭あり。知事は何時もながら殿下の御仁慈に涉らせ給ひ、各般の事業奨励の御思召厚きに感銘しまつりたり。御舟遊一時間半許にして四時

前御帰船遊ばされ、堂形の棧橋に着せ給ふ。御列全く以前と同じくして四時十五分御還御あらせらる。此日東郷大将は供奉第一船に乗せらるべく予定しありしを、特に殿下より御座船に召させ給ひ「今日湖上の水師提督は卿が勤むるよ」と仰ありけるに、大将は海洋の指揮は心得て候へども湖上の提督は勤り申まじき由申上げしに、殿下にはいとど興に入らせ給ひ、御機嫌麗しかりしと承はりぬ。

(第五船 大橋茂右衛門、神谷源五郎、三島佐次右衛門、青山泰石、山口家扶其他松平家の関係者数名)

『行啓記念 春日の光』(明治40年11月、上田仲之助編、121頁)

「二十五日は午前城山御旅館庭前に於て松平伯より献上催にかかる旧藩各流の武術仕合を御覧あらせられ、午後は二時御出門、木戸侍従長御陪乗、御微行にて松平家の催にかかる宍道湖上の御舟遊あり。御機嫌殊にうるはしく、御携帯の御機械にて四周の風景を御自づから御撮影あそばされ、次で松永知事を召され四辺の眺望、山岳、河川の名称につき種々御下問あり。尚ほ勸業、教育、慈善、水難救済等の各事業に関する調書を差出すべき旨御沙汰ありて、同四時十五分御旅館へ御帰還あらせられたり。」